Research Institute for World History

Newsletter

No. 9　December 2006

CONTENTS

特集「世界史教育は不要か」

緊急アンケート

1. 南塚 信吾（世界史研究所長、法政大学教授）
2. 西川 正雄（世界史研究所顧問、東京大学名誉教授）
3. 百瀬 宏　（世界史研究所顧問、津田塾大学名誉教授）
4. 鳥越 泰彦（麻布高等学校教諭）
5. 澤野 理　（神奈川県立新城高等学校教諭）
6. 鹿住 大助（千葉大学大学院社会文化科学研究科博士課程）
7. 崎山 直樹（千葉大学大学院社会文化科学研究科博士課程）

1. 第５回世界史キャラバンの報告
2. Web 世界史「Center for History and New Media」
3. 世界史研究所からのお知らせ

http://www.npo-if.jp/riwh/

発行：NPO-IF 世界史研究所
千葉大学文学部史学科西洋史研究室

RIWH　npo-if

世界史研究所「ニューズレター」第9号　2006年12月

特集

「世界史教育は不要か」

緊急アンケート

最近問題になっている高等学校での世界史必修の飛び越え問題は、たんに高等学校での卒業単位の補充や補講の問題ではなく、また高等学校での受験教育の問題でもなく、もっと根本的な問題を内包している。それは、高等学校や中学校における社会科と歴史教育全般の問題であり、さらには、日本人としての歴史的思考の問題でもある。われわれは、今回の問題が、必修科目として世界史をはずすといった最悪の、小手先の措置で終わってしまうことを、時代に逆行する愚行として強く懸念する。

今回、本研究所は数名の専門家に緊急の自由記述アンケートのかたちで、この問題へのご意見を求めた。ここにそのすべてを収録することにする。

南塚 信吾

（世界史研究所長、法政大学教授）

1. 世界史の必要性

世界史教育の必要性は「指導要領」にも「目的」として記してあるとおりである。「指導要領」は、世界史Aと世界史Bとに分けて「目的」を記しているが、あまり違いが分からない上に、論理的にもすっきりしていないという問題はあるものの、ほぼ次のような点に、世界史教育の意義を見出している。それは、

（1）人類史の課題を広い視野から多角的に考察させること。

（2）現代世界の特質や文化の多様性を広い視野から歴史的に考察させること。

（3）世界の歴史の大きな枠組みと流れを、我が国の歴史と関連付けながら理解させること。

（4）国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養うこと。

である。それぞれ納得のできることが押えられている。

舞台を現代において考えるならば、グローバリゼーションの進む現代において、グローバリゼーションを是とするか非とするかは別としても、世界的な規模で歴史的にものを見ることができないと、まさに歴史から取り残されていくのではないかと懸念される。

2. 世界史教育の問題点

もちろん、これまでの歴史教育に問題がなかったわけではない。とりわけ、日本史と世界史という二分法は、不思議な方式である。これは、世界の「世界史の学会」では驚かれる方式である。両者は一体化すべきであろう。

しかし、注目すべきは、数年前までの中学の日本史教科書は、世界史にあたる部分をかなり多く取り入れていたのである。だが、最近の日本史の教科書はこれまでの世界への関心をすてて、「鎖国」化してきている。『新しい歴史教科書』がその典型である。日本史だけを学んで、ひとりよがりの歴史観を身につけることになっては困る。実生活はグローバル化しているのに、歴史観は「鎖国」化していくからである。

3. 世界史の中に日本史を取り組んだ「世界史」が必要

現在のような日本史と世界史の縦割りは、日本史をも正しく学ぶことを妨げている。たとえば、開国から明治維新を真に理解しようと思えば、当時の西欧諸国の動きやそれに対するアジア諸国の対応を視野に入れることが、不可欠である。また、日露戦争を理解しようと思えば、朝鮮や中国やロシアのみならず、露仏同盟、南ア戦争を視野に入れなくてはならないし、フィリピン問題を考えなくてはならない。さらに、1955年のバンドン会議や1960年代のベトナム戦争を抜きにして日本の歴史は語れないのである。

だから、世界史の中に日本史を取り組んだ「世界史」あるいは、日本史の中に世界史を広く取り込んだ「世界史」（これはどちらからのアプローチでも良い）が必要であると思われる。

4. 歴史的思考力を培うこと。

歴史的思考力をつけるということが必要なことは言うまでもない。だが、歴史的思考とは、単に年代を覚えたり、単に史料を読むということではない。現代の問題に

ついての主体的な意識から、それをどう解決するかを考え、そうした「方向感覚」から過去と「対話」することが、歴史的思考力ということなのである。

その際、世界史の中に日本史を取り組んだ「世界史」あるいは日本史の中に世界史を広く取り込んだ「世界史」がない状況の下では、日本史（だけ）ではなく、世界史を学ぶことによってはじめて、「混沌」とした歴史の中にあって、その流れを見定めていくという歴史的思考が養われるのである。

今日のわれわれが抱える「問題」は、決して日本だけの範囲にとどまるものではなく、世界的につながり、広がっている。そういう問題への対応は、日本史のみを学んで、世界史を飛ばしては絶対に不可能なのである。

西川 正雄

（世界史研究所顧問、東京大学名誉教授）

世界史教育未履修問題について

「世界史」という発想は歴史研究にとって極めて重要である。だからこそ、この「世界史研究所」も発足したのである。

これからの世代が、中学・高校で世界史をぜひとも学んで欲しいと思う。それは、日本とは違う世界があるということを知って、自国中心のイメージを変えるだけではなく、多様な世界の存在に気付いて好奇心を抱くことになると思うからである。

世界史の重要性を、ここで更に強調するつもりはない。むしろ、「世界史未履修」が何故、今になってマスコミを賑わせたのかを問題にしたい。必修にも拘わらず、世界史を取っていないという学生がいることは、大学での授業の折に分かっていた。文科省や教育委員会が知らなかった筈はない。それなのに、今、問題化したのは、安倍首相周辺の文科省叩きという意図による「陰謀」ではないかとすら思わざるを得ない。

それはともかく、「指導要領」は法律ではない。それぞれの学校で、教師が考えにしたがって授業を行なう自由があり、それこそが大切なことだ。「指導要領」違反であり、補修を行なうべきだ、というマスコミの論調がおかしい。校長先生が自殺するという悲劇まで生んでしまった。

「教育基本法」改正に関する参院における議論の中で、文科相は、「教育基本法」が教育が「不当な支配に服する」ことを禁じており、その文言が「改正案」にも残されている点について、政府の教育行政は「国民の意思」によるもので「不当」ではなく、「特定のグループ・団体」の主張が「不当」だと答弁した。何たることか。民主主義とは、政治権力を憲法をはじめとする法律で規制することを基礎としている。市民は、個人としてであれ、団体としてであれ、意見を述べる権利を有している。ところが、文科相は、政治権力は何をしてもよいと公言している。民主主義のイロハが分かっていない。教育はいかなる政治権力からも独立していなければならない、という年来の主張を改めて強調したい。

世界史未履修の生徒がいることは憂うべきだが、その点にだけ目を奪われて、「指導要領」に従っていないのはけしからん、などという論調に与してはならない。これを機会に世界史教育を考えよう、という発想も貧しい。世界史教科書への注文がふえたそうだが、そんなことに喜んでいる場合ではない。目下の大問題は、教育の自主権が奪われようとしている事態に、どう反撃するかではないか。そもそも、或る科目だけを「必修」とすることが間違っている。現場の教師の判断に任せるべきことだ。その上で言えば、「指導要領」に逆らって、大学受験のために、世界史を授業から外したほど「自主性」のある先生方に訴えたい。世界史を学ばぬままの生徒を世に送り出してよいのですか、と。

百瀬 宏

（世界史研究所顧問、津田塾大学名誉教授）

私は、去年３月まで、広島市立大学で「国際関係史」を専任教員として授業し、以後は今日まで、東京・小平市の朝鮮大学校で、「世界近現代史」を外部講師（非常勤講師）として講義しております。そのいずれの場合にも、自国の日本の近現代史をどう見るかを原点にしないと、学生たちが、日本人にせよ在日外国人にせよ、納得するような世界史の授業はできないことを、いつもながら痛感しております。

さて、高校の世界史教育ですが、戦後に発足した新制高校二期生の体験をもつ私は、わが国の教育政策の中で世界史がまともに扱われたことがあったのか、という疑問を拭い去ることができません。新制高校発足の際、文

部当局が占領軍に気兼ねして高校社会科を、一般社会、西洋史、東洋史で構成したところ、日本史も授業してよいということになって、既定単位数の中で日本史を消化しなければならないという事態に直面、西洋史と東洋史を合併して「世界史」にしたという軽業のようなお役人の芸当によって誕生したこの科目には、もとより当局の構想などあるはずもなく、「生徒と相談してやれ」という指導がなされたとかで、講習から帰られた先生が何聞いても薄笑いして「そうかな・・・」と仰っていたことを思い出します。悪い星の下に生まれた世界史という科目は、しかし、高校と大学の教員が『世界史の可能性』という空前絶後の研究会を開いたり、高校の現場教員の懸命な工夫と努力、心ある大学教員の教科書作りの熱心によって、ようやく成り立ってきたのだと思います。世界史をめぐる今回の騒動も、こうした背景、近頃の政治状況、教育政策の貧困から生じているわけで、現場の先生方の責任にするのは間違いでしょう。

鳥越 泰彦

（麻布高等学校教諭）

改めて「世界史」教育の意味を問う

今回の世界史未履修問題は、全国の高校の約１割でしか起きていません。従って、ある意味ではそれほど大きな事件ではない、と言えるでしょう。しかし問題となった学校の多くが進学校である、ということがこの問題の本質をよく示していると思いますし、それゆえに、たとえ約１割の高校だけで起きたこととはいえ、大きな問題であるとも言えます。それは、この問題が大学受験と世界史教育、世界史教育は何のためにあるのか、という問題をわたしたちに突きつけていると思うからです。

今回の問題が進学校でおきているのは、ある意味、必然的です。なぜなら、現在の大学受験の試験では、地理歴史科を２科目必要とする大学は、東京大学文系と京都大学文系学部だけだからです。よってそれ以外の文系の生徒は１科目で受験できますし、ましてや理系の生徒では、地理歴史科を受験科目にしなくても大学に合格できます。従って、世界史と日本史または地理を学ぶ、という最低２科目必修の制度が受験生には障害となっているのです。しかも世界史は「範囲が広く、覚えることが多い」として受験生からは敬遠されています。このことが問題の大きな原因だと思います。でも私はそのことによって、「大学受験の科目を増やせ」と言いたい訳ではありません。受験校の地理歴史科の教師たちが、「受験に関係ない教科は学びたくない」という生徒たちに対して、世界史を学ぶ本質的な意味を語ることができていない現状が、今回、明らかになったのだと思っています。大学の教職課程で教えていると、余計にそのことをひしひしと感じます。教員志望の学生は、その多くが、地理歴史科教育＝受験教育と安易に捉えて語り始めますし、予備校の講師こそ、教師のあるべき姿だと思い、それを思い描いて、教師をめざしているからです。彼らにとって地理歴史科の授業は、たとえプリントの穴埋めや講義であっても、楽しかったからそれで良かったのでしょう。しかしそのような学生のみが、将来の地理歴史教育、世界教育を担っていく、というところに、まず大きな問題があるといわねばなりません。歴史好きの学生たちが高校生だった頃、周りには歴史嫌いの生徒が絶対いたはずです。また歴史好きの生徒であっても、数学や物理など嫌いな教科があったはずです。そのようなことが何故起きるのか、そのことから出発し、「全国の高校生が世界史を学ぶ意味があるのか」、「あるとしたらどのような意味においてか」を教師たちが考え直さなくてはなりません。世界史の時間に、内職や居眠りする生徒に対して、それを怠慢だ、と決めつける前に、自分の授業が生徒にとって、どのような意味を持っているのか、を問い直すことから始めるべきだと思います。

では、世界史を全ての高校生が学ぶ意味は一体どこにあるのでしょうか。私はそれを考えるためには、改めて文部科学省の学習指導要領は読み直されるべきだと思います。「世界の歴史の大きな枠組みと流れを、我が国の歴史と関連付けながら理解させ、文化の多様性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。」という世界史Ｂの目標を批判するのは容易ですし、また必要なことでもあります。しかし世界史教師はこの世界史Ｂの目標を理解した上で（またはその批判の上に立って）、授業を創っているのでしょうか。もしそうだとしたら、なぜにこんなに「世界史は暗記だ」という風潮が蔓延っているのでしょうか。まがりなりにも、現行学習指導要領は、歴史的思考力を培うことを目標としていますが、そのような世界史教育を受けてきた教職志望の学生は、皆無に等しい状況です。「基礎知識がなければ、歴史的思考力は育たない」という言説はしばしば耳にしますが、基礎知識は必ず教師が与え

なくては、生徒は獲得できないのか、また日本のような語句穴埋め式のプリントや問題集で、歴史的思考力につながる基礎知識は獲得できるのでしょうか。私は、生徒に興味を持てる課題を与え、そこから生徒が史実を探し出し、理解していく過程があることを、自分の学校の教室での経験から学びましたし、歴史的思考力に役に立つということなのであれば、いわゆる「基礎知識」を生徒が定義できるような指導をするべきだと思うのですが、日本ではそのような指導をほとんど見たことがありません。

さらにどのような立場に立って、世界史の学力を評価するのか、ということも、改めて考え直さなければならないのではないでしょうか。歴史用語を穴埋めさせたり、些細な事実の間違いを指摘させたりする問題で、果たして世界史の学力は測れるのでしょうか。私は以前こういう経験をしたことがあります。中国漢王朝の学習のときに、都から地方へ命令として下された木簡を、現代語訳して生徒に配り、そこから何を読みとることができるか、という課題を出し、生徒たちをグループ分けして議論してもらいました。その結果を生徒たちに報告してもらったのですが、日頃の私のテストでは非常に点の悪い生徒が、「この時代に文字によってコミュニケーションがとることができた」と発言しました。私はこの発言に衝撃を受けました。これは私の課題に対する立派な解答の一つです。当時の世界を考えれば、彼は歴史的な思考を十分に行っていると言えるでしょう。しかし彼のテストによる評価は低いのです。その時に、私が考えたことは、私の評価方法、もしくは世界史教育理念がしっかりしていないことが問題なのではないか、もっと多様な方法で評価しなくてはならないのではないか、ということです。

また、生徒たちが大学受験を乗り越えて、主権者として判断していく主体になるということを見据えての世界史教育も必要だと思います。その意味で、第二次世界大戦後史はとても重要ですし、また「首相の靖国神社参拝問題」「北方領土問題」を歴史的視野も考慮して、レポートを書いてもらう試みをしています。歴史を理解することが、大学受験を超えて、またはそれとは関係なく、どのように役立つのか、を少しでも実感してもらいたいという、私の願いからですが、まだまだ成功しているとは言えません。

ともかく、世界史教育の意義については、関係する人々や関心を持つ人々が積極的に関わり、考えて欲しいと思います。「自分は受験教育に反対だけれども、実情では仕方ない」というのであれば、その人の理想の教育は一体どのようなものなのか、そしてなぜそれが実現できないのか、そしてそれは現在の環境で全く実現不可能なものなのか、考えて欲しいと思います。私が最も危惧することは、上記のように語る人に、実は理想の歴史教育像がないのではないか、またはそれは「歴史用語暗記主義」や「流れを理解する」といった域を脱しないものなのではないか、ということです。「流れを理解する」という言説も、世界史教育の目的としてよく語られるものですが、理解する主体がつねに教師であるのならば、生徒にとって、それは「歴史用語暗記主義」の延長にしかないのではないか、と思えます。

勿論、大学に対しても世界史の入試問題の改善を望みたいという気持ちは当然あります。

実際、一部の大学では、「何故にこのようなことを、高校生に問わなくてはいけないのか」ということを疑問に思わざるを得ない問題が毎年出題されるからです。

しかし私が今回このようなことをあまり強く主張する気がないのは、受験制度に問題があるから、今回の未履修問題が起きた、という安易な理解は、事の本質をねじ曲げる、または本質的な問題を見逃してしまうことになると思っているからです。

改めて私なりの考えを述べるのならば、今回の問題は、世界史教師が、生徒に世界史を学ぶ意味を語ることや理解してもらうことをせずに、それで講義一辺倒、プリント穴埋め式の授業にしがみつき、その上で、彼らが実感として知っている時代まで、授業が至らなかったり（いまの高校生は冷戦対立の終結前後に生まれています!)、または彼らに興味を持てる題材を取り上げないで、教科書のゴシック体の暗記を強いているというところに原因があるのだと思います。だから、生徒から世界史を学びたくない、受験には使わないから他の科目をやって欲しい、という論理が生徒からでできて、教師はそれに対抗する術を持てないのだと思います。今こそ、「なぜ世界史なのか」「何が世界史なのか」という単純ですが、根本的で奥深い問題に、わたしたちは改めて取り組まなくてはならないのではないでしょうか。

澤野 理

（神奈川県立新城高等学校教諭）

「世界史飛ばし」の先に何がある。

高等学校の世界史必修は、1994 年の学習指導要領施行（1989 告示）に始まる。この必修化は、戦後民主教育の象徴と見られることもあった「社会科の解体」（以後、地歴科・公民科となる）と併せて実施された。当時、社会科解体については、高校現場・教育学界から多くの反対意見が表明された。余談ではあるが、その中には 1990 年代以降自由主義史観を提唱し、歴史教育の「改革」を高らかに表明したことで有名になった藤岡信勝氏（転向前の）も含まれている。一方世界史、必修化の方は、当時の右傾化しつつある社会情勢を踏まえて「いずれ訪れるであろう日本史必修化の布石ではないか」との見解を述べる者もあったが、社会科解体というインパクトの前では、影の薄い問題とされてしまった。その後、もう一度の指導要領改訂（高校は 2003 年施行）を経て今日に至るのだが、この間、小・中学校の社会科教育の内容からは、外国の地理・歴史に関する事項が大幅に削られてしまった。

実は、ここに現在の問題の原点がある。世界史を敬遠する生徒は、「内容が難しい」「覚える量が多い」と言うが、この点では、高校日本史も世界史に引けをとらない。しかし、日本史は小学校より学んできた基礎知識があるので、生徒たちは「取っつきやすい」と思いこんでいるのだ。センター試験で日本史選択者の方が多いのも、こうした先入観によるところが多い。実際、センター試験の平均点も、世界史の方が高い場合がほとんどである。

本年 5 月 20 日の毎日新聞で、神奈川県の引地教育長が日本史必修化を周辺自治体の教育長と連携して文科省に要望する意志を表明したと報道された。この動きは、8 月 31 日の首都圏教育長協議会（東京・神奈川・千葉・埼玉）を経て、9 月 12 日に 4 都県教育長連名の要望書が文科省に提出されるところまで進んでいる。そうした中、今回の「世界史飛ばし」が大々的に報道され、これを受けて「生徒のニーズが高いのだから日本史必修化を考えるべきだ」というような頓珍漢な意見も聞かれるようになった。「国際社会に生きる日本人としてのアイデンティティをはぐくむため」とは、日本史必修化論者の論拠である。しかし、義務教育で学ぶ歴史・地理で、ほとんど世界のことを教えない現状で、単純に日本史のみが必修化された場合、そこではぐくまれたアイデンティティからは、他者を顧みない偏狭なナショナリズムしか生まれてこないという危険性がある。前述の要望には、「近代以降の日本史と世界史を融合した新科目の創設」という選択肢もあるようなので、世界史が必修から外されるのなら、この方向が追究されるように願ってやまない。

鹿住 大助

（千葉大学大学院社会文化科学研究科博士課程）

世界史教育と歴史研究

筆者は現在大学院で 18 世紀リヨンの絹織物工業ギルドを研究しており、歴史研究を志す一学生の観点から「世界史教育飛ばし問題」について私見を述べる。「教育問題」全体を論じきれないことをお許しいただきたい。

筆者の研究対象はフランスの地方都市における同業者団体であり、対象を限定することで過去の社会をより具体的に明らかにしたいと考えている。しかし、対象として想定する社会は常に外部との諸関係の中に置かれていることを忘れてはならない。

世界史教科書にもあるように、養蚕と絹織物生産は紀元前の中国に端を発し、シルクロードを通じて東西を横断した交易が行われるなかで、ヨーロッパに技術が伝播したものである。イタリアに伝わった絹織物生産は、16 世紀以降フランスでも開始され、リヨンは王権によって国内の絹織物生産における特権的な位置を獲得し発展を遂げる。ヨーロッパの絹織物生産における中心地となったリヨンは 18 世紀以降人口が増大し、生産力をいっそう高めていく。他方で、絹織物業者の社会内部では大商人と絹織物労働者という社会階層間の格差が拡大し、1830 年代の絹織物工蜂起から階級闘争の時代に入る。

このようなリヨンの絹織物業の歴史は、常に外部との関係において理解されなければならない。17 世紀末、宗教的寛容を定めたナント王令の廃止により、新教徒の絹織物工がイギリスやドイツなど他のヨーロッパ諸国へと亡命し、各地での絹織物生産が本格化される。また、植民地・海外市場獲得競争、工業化を遂げた中国やインド、日本産の廉価な絹のヨーロッパへの流入などの事態を受け、リヨンの絹織物業は常に海外との取引、競争を意識してきた。18 世紀からすでにリヨンの絹織物商人たちは王権に対して海外の脅威を訴え続けており、こう

した商人＝資本家と争った 19 世紀の絹織物工の蜂起は、世界史的な文脈を知らなければ理解できない。また、世界史における繊維工業の歴史的展開を理解しなければ、リヨンの絹織物工業の盛衰を論じることはできない。

筆者にとって、高校までの世界史教育において教授された知識と世界史の流れをどのようにとらえるかという視点は、個別具体的な歴史研究のテーマを追求するための基盤をなしている。世界史があるからこそ、リヨンの絹織物工業という限定的な対象に目を向けることが可能になるのである。世界史を思考することなしに海外の一地方史を研究して何が面白いだろうか。

崎山 直樹

（千葉大学大学院社会文化科学研究科博士課程）

世界史未履修問題は日本社会が高校生に強いている競争的な大学受験と密接な関係を有しており、そこに本質的な問題点が隠されている。したがってこの問題を考える上で、日本社会は、受験制度を通じて高校生にいったい何を学ばせているのか、ということを考えてみる必要がある。

高校生は大学受験を通じ、日々の学習あるいは模擬試験などを利用し、自分の能力を客観的（数値的）に把握する術を学んでいる。全体の中での自分の位置、そして個々の科目の能力、これらを自己の目標とする大学が要求するスコアーへと近づけ、合格する確率をあげることが、受験当日までの主な目標となる。これは言い換えるならば、大学が求める人間像へ自己をいかに適応させられるかというゲームである。もしくは逆に、自分の能力を基準に入学可能な大学を選別し、その選択肢の中から社会的に最も優れている大学を選べるか、という競技でもある。大学受験というものは、短期間に大量の人間を取捨選択するために特化したシステムを有しているために、そこで下される評価は、表層的かつ画一的なものとなってしまっている。むしろ、そのような試験制度ゆえに、非常に効率的に日本社会が要求する人材を大量生産しているともいえるかもしれない。

このゲームにおいては、数学であろうと英語であろうと、ましてや国語でおいてさえも、あくまで合格という目標到達のための手段にしかすぎない。多くの場合、複数の科目からいくつかを選択するだけで良いのであるから、高校生の限られた学習時間は優先的に受験に必要な科目に割り振られるわけであるし、不得意科目は当然のように切り捨てられる。いくら文部科学省が世界史を「必修」と定めようとも、大学が、あるいは社会がその必要性を認め、受験の必修科目として扱わない限り、それはあくまで名目上の必修に留まる。

文部科学省がどのような政策意図をもって世界史を必修科目としたのかはわからない。学習指導要領が掲げている「国際社会に主体的に生きる日本人」の育成のためには、やはり世界史認識を深めることは重要なことであろう。しかし、現行の受験制度、あるいはそれを生み出している日本社会は未だに世界史を決して重要なものとしてはみなしていない。国際社会において、相互理解あるいは自己認識のために世界史ができること、このことについて歴史家は今一度社会に問いかける必要があるのだろう。

第５回世界史キャラバンの報告

渡辺 昭子（司会）

▲第５回世界史キャラバン、南塚信吾氏講演

2006 年 11 月 25 日、長野県木曽郡南木曽町の大妻籠集会所で第５回世界史キャラバンを開催した。タイトルは「貞奴から見 た世界史」。今回は、以前のキャラバン「日清・日露戦争の時代」で登 場した川上貞奴を中心テーマに据えた。南木曽は貞奴ゆかりの地である。夫の音二郎死後、貞奴は木曽川水力発電を開発した福沢桃介と親交を結ぶ。南木曽には桃介の別荘があり、貞奴も頻繁に訪れ、政財界人や外国人技術者を招いて宴を催したという。この建物は現在、福沢桃介記念館となっていて、私たちも講演前に見学することができた。

今回は南木曽町商工会議所との共催で、第３回のキャラバンでお世話になった佐藤博康氏のコーディネートによる。南木曽町観光協会では「南木曽町から始める外国人もてなし講座」を開催していて、その第２回目の講座でもある。南木曽町のかたがたのご尽力のおかげで、多くの参加者に恵まれ盛会であった。お世話になったかたがたには、この場を 借りてお礼申し上げたい。

貞奴は世界各地を公演して回った。貞奴が活躍した 19 世紀末から 20 世紀初頭は、普通の人たちが世界を駆け巡るようになった時代でもある。今回の公演では、貞奴を始めとする人の移動からこの時代を考察した。

まず始めに、今回の企画を立ち上げ、調整役を務めた松本大学教授の佐藤博康氏が開会の辞を述べた。木曽路はアメリカの本で紹介されたこともあり、近年、国外からの観光客が増加し、国際的な結びつきへの関心が増えてきていることを指摘し、この講演の意義を説いた。

最初の報告は木村英明氏（早稲田大学講師、世界史研究所研究員）による「世界史を駆け抜けた女優～川上貞奴」である。貞奴のさまざまな公人との交流や世界各地での公演の評価を紹介しながらその足跡をたどる。その成功は異国情緒的なジャポニズムのみによるものではなく、当時の欧米を席巻し始めていたモダニズムとの共通性から検討すべきであ ることを指摘し、芸術における国際的な相互影響にまで視点を広げて検討した。また、現在翻訳中の貞奴についての本の中から、南木曽とかかわる部分を紹介した。

次いで南塚信吾氏（法政大学教授、世界史研究所所長）が「4 つの海を渡った音二郎・貞奴」の題で報告した。音二郎と貞奴は太平洋・大西洋・地中海・インド洋を渡って世界各地を巡業した。この時期には世界の主要地域を結ぶ定期便が就航し、この二人だけでなく、多くの人々が遠隔地に移動するようになった。貞奴たちの行程をたどりながら、南塚氏は各地で起きた出来事を解き明かし、まさにこの時代に世界が急速に一体化し始めることを指摘する。大規模な資本の移動をともない、同時に強烈な愛国主義と軍国主義を引き出す帝国主義の時代が到来したのである。

▲木村英明氏講演

▲澤野理氏講演

神奈川県立新城高校教諭の澤野理氏は「海を渡った日本人たち～世紀転換期の日本人移民～」のテーマで報告した。貞奴が活躍した時代は、日本から海外への移民が増加し、なかでも、出稼ぎ型のから定住型へと移民の性格が変化してゆく時代だった。移住先での労働や生活、政治状況とのかかわりなどについて、映像資料を活用しながら考察した。結び には、在外日系人および在日外国人が今日抱える問題とそれへの取り組みについて紹介した。

休憩を挟んで後半は、信州のこの地域に視点を据えてテーマを検討する。飯田市歴史研究所研究員の鬼塚博氏の報告は「満州移民送出の諸前提－－ 1920-30 年代の飯田下伊那」である。1920 年代から 30 年代にかけて、下伊那は多くの満州移民を送り出した。その背景について、養蚕と経済発展、土地所有形態、人口増加、公共工事とその助成などの側面から検討し、大量の移民送出の理由は一般に言われているようにたんに貧困にあるのではなく、これらの諸要因が複合的に影響していることを明らかにした。

最後は、妻籠を愛する会理事長の小林俊彦氏が「桃介、貞奴の暮らした南木曽の近代化の歴史」と題して、各報告にかかわる事例を紹介しながらコメントし、南木曽の歴史を語った。桃介に水利権を渡すことを認めた書類の裏には村長を罵倒する言葉が記されていて、桃介と村長に対する住民たちの反感がひしひしと感じられることなど、この地域に残る 史料を丹念に読み解いてきた方ならではの話はとても印象的だった。

以上の報告の後、質疑が交わされ、南木曽町商工会議所事務局長の藤原義則氏が閉会の辞を述べて、第 5 回世界史キャラバンは幕を閉じた。

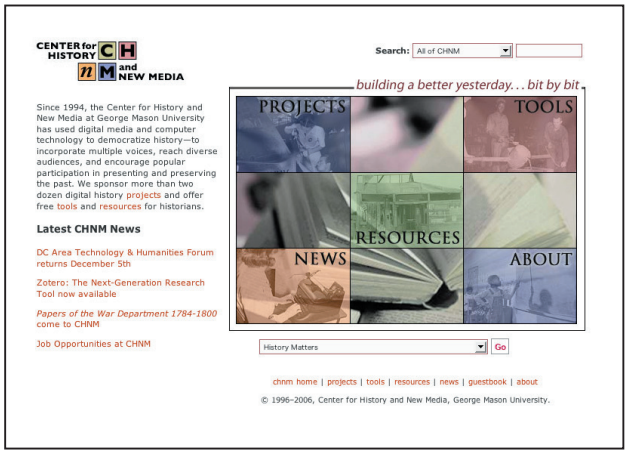
その後、近くのふれあい館に場を移して、いろりはた会議となった。猪の肉と地元野菜の煮込みや囲炉裏で焼いたごへい餅、岩魚酒やそま酒をご馳走になりながら歓談し、最後に木曽節を拝聴して会場を離れ、宿（寛政年間から続くまるや）へと向かった。

▲鬼塚博氏講演

Web 世界史

毎回 Web や CD-ROM など電子化された世界史研究情報を紹介していきます。
世界史研究所のウェブサイトにもここで紹介したものを掲載しています。

Center for History and New Media　http://chnm.gmu.edu/



▲「Center for History and New Media」http://chnm.gmu.edu/

今回紹介するのはジョージ・メイソン大学の「Center for History and New Media」が運営するウェブサイトです。同センターでは 1994 年以来、デジタルメディアを用いた歴史研究・教育情報の蓄積と発信で、先駆的な取り組みを行っています。

同センターの活動には（1）歴史資料を展示するウェブサイトの情報収集・分類・紹介と検索システムの提供、（2）フランス革命や 9.11 事件など各テーマ別の歴史展示プロジェクト、（3）歴史を学ぶための各種ツールの開発と提供、（4）歴史教師への教材の提供などがあります。これらのプロジェクトごとに多数のウェブサイトが構築・運営されており、ここではその一部だけを紹介したいと思います。

同センターのプロジェクトのひとつに**「World History Sources」**（http://chnm.gmu.edu/worldhistorysources/）があります。**「World History Sources」**では、世界史を指導する教師と世界史を履修する学生向けに、インターネット上に存在する歴史史料を展示する数千のウェブサイトを、目的別・分野別に分類し、詳細な解説を加えてます。また、地図や新聞、公文書といった史料を歴史家がどのように分析しているかを、研究者による音声・動画の解説つきで説明しているページもあります。さらに、こうした史料を教師が授業の中でどのように用いて、教室で生徒に議論させているか、高校・大学教師による 16 の実践事例が紹介されています。世界史教育の実践のために有益な情報を提供しているだけでなく、ここで紹介されたウェブサイトには研究者にとっても有益な情報がつまっています。

また、同センターでは**「The September 11 Digital Archive」**（http://911digitalarchive.org/）　や**「Liberty, Equality, Fraternity: Exploring the French Revolution」**（http://chnm.gmu.edu/revolution/）など、歴史的事件に関する資料の収集、展示を行うウェブサイトも構築しています。**「Hurricane Digital Memory Bank」**（http://www.hurricanearchive.org/）では、近年のハリケーン（カトリーナ、リタ）による被害についての報道、写真なども展示しています。これらは、歴史資料のデジタルアーカイブとしての機能を果たしてます。

この他にも同センターでは数十のウェブサイトを運営していますが、最後に同センターが開発したツールが面白いので紹介しておきたいと思います。学生向けには 779,420 件のシラバス情報を収集し、検索システムを提供する**「Syllabus Finder」**があります。また、ウェブ上の図書館データベース、書店のデータベス検索結果に表示される書名や著者などを収集してデータベース化するブラウザ用プラグイン**「zotero」**（http://www.zotero.org/）の開発・無料配布を行っています（※ Firefox 用のプラグイン、β版）。ブラウザ上で作成できる年表作成プログラムの提供や、興味のあるウェブページをスクラップブックのように収集できるソフトもあります。

このように、同センターではインターネットという媒体の特性を活かした活動を大規模に展開しています。

▲「zotero」http://www.zotero.org/

世界史研究所からのお知らせ

第 4 回世界史懇話会開催のご案内

来年 (2007 年)1 月に、第 4 回目となる世界史懇話会を開催することとなりました。今回は法政大学において、ウィーン大学教授の Susanne Weigelin 氏を招いて、中国史と世界史についてご講演いただく予定です。

年初のお忙しい時期とは存じますが、是非ご出席下さいますようお願いいたします。

1. 日時：2007 年 1 月 15 日（月）午後 3:00 － 5:00
2. 場所：法政大学市ヶ谷キャンパス 80 年館 7 階大会議室 1（会場地図は下記アドレスをご参照下さい）
   http://www.hosei.ac.jp/gaiyo2/campusmap/ichigaya2.html
3. 講師：Dr. Susanne Weigelin（オーストリア、ウィーン大学教授）
   Weigelin 先生は、いわゆる、グローバルヒストリーの「ウィーン学派」の中心的学者で、近現代中国研究がご専門です。
4. 論題：Chinese History and World History: Debating Universalism and Particularism in the Context of 20th Century Chinese Historiography
5. 言語：英語 適宜通訳します。

主催：1980 年代史研究会、NPO-IF 世界史研究所

世界史研究所ウェブサイトに以下の論考が掲載されています

世界史研究所ウェブサイトに、当研究所所長の南塚信吾氏の論考が２つ掲載されています。

1.「おくれたヨーロッパとすすんだアジア」

2.「世界史における『ハンガリー 1956』」

「おくれたヨーロッパとすすんだアジア」は今年 5 月に行われた日本西洋史学会大会、公開講演会での著者講演を文章化したものです。「世界史における『ハンガリー 1956』」は今年 50 周年を迎え、日本でも「ハンガリー 1956 年」シンポジウムが開催されましたが、その成果をふまえてハンガリーの 1956 年の世界史的意義を問うた論考です。

両論考とも世界史研究所ウェブサイト（http://www.npo-if.jp/riwh/）日本語版のページに掲載されていますので、是非ご一読下さい。PDF 版も配布しています。

URL：

1.「おくれたヨーロッパとすすんだアジア」http://www.npo-if.jp/riwh/weblog/index.php?itemid=98

2.「世界史における『ハンガリー 1956』」http://www.npo-if.jp/riwh/weblog/index.php?itemid=108

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 9F　TEL：03-3400-1216　FAX：03-3400-1217

E-mail：world_history@npo-if.jp　URL：http://www.npo-if.jp/riwh/